

ドナウ川 (セルビア)

コソボ紛争「有毒の遺産」



世界川物語



結婚記念日を祝いワインで乾杯する夫婦。ベオグラード市内には川を眺めながら食事を楽しめるレストランが数多くあり、店主自らが漁に出るこの店には、取れたての魚を目当てに大勢の客が訪れていた

ゆ ったりとしたザパ川の流れを受け入れ、ドナウ川はさらに水量を増してかなたまで続く。ローマ帝国の時代から川の合流点を見下ろす丘の上に建つベオグラード要塞(ようさい)から見下ろすと、ここに暮らす人々と川の大切な関わ

りが見えてくる。ドイツに源を發し、黒海に注ぐ欧州第2の川ドナウ。かつてここを往来した貨物船は観光クルーズ船に、川沿いの倉庫は現代的なカフェやレストランに姿を変えた。しかし、ドナウ川は今もセルビアの人々の暮らしの間にある。カッパルや家族が夜遅くまで語り合う川べりのレストランの売り物の一つは新鮮な魚料理。食卓に供する直前、地元の川漁師らが近くの川で取ってきたものだ。

3 月24日、遠くから響く飛行機の音、さく裂する爆弾の音と衝撃。立ち上る黒煙。ベスコスキは大学近くのアパートの一室で、おのきなながら見つめていた。爆撃された製油所は何日にもわたって燃え続け、黒煙が空を埋めた。

「川の恵みは市民になくはならないものだ。その川の水やここにすむ生き物に目に見えない汚染が広がっているかもしれない。でも、誰もそれを分かっていない」。化学が専門のベオグラード大准教授、ウラジ

見えない汚染、続く闘い



民族対立に端を発したコソボで北大西洋条約機構(NATO)旧ユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設は徹底的に破壊された。約3カ月の爆撃の後、ドナウには「有毒遺産」と呼ばれる目に見えない汚染が残された。発電所や工場からリ塩化ビフェニル(PCB)などの有害化学物質が大量に川に流れたのだ。

空爆直後、国連は化学物質汚染を確認するため、調査チームを派遣。汚染の深刻さを「ホットスポット」と称された場所の多くは、ナウ川に面していた。

高濃度PCBを含む変圧器を撤去、処理された。しかし、工業水などに含まれる有害物質に紛れ、遺産が加わり、汚染は今も続いている。

後にベオグラード大学の研究チームは、首都周辺の魚に高濃度のPCBなどが蓄積していることを突き出した。しかしサンプルが少なく、態は分からないままだった。

2 012年10月、ベオグラード空港に降り立った2日本人研究者が、ベスコスキと握手を交わした。

大阪大特任教授の中野武(たけ)は、PCB製造企業が立地し、海洋泥の深刻な汚染が問題になった県で生まれ育った。中野はこれまでPCBの分析や処理技術の研究などに40年近く、研究者人生を費やしてきた。

「研修で来日したセルビアの者から、紛争の遺産のことを聞居ても立って貰えなかった。言う。セルビアとの共同研究の